



六
花

11

2021

りっかはいくかい

明日香村 ◎ 山田六甲

千

萩叢や蘇我入鹿の首塚に

うのさくらのみめみこ

葛の花 鷓野 讚良皇女と

海峡の秋風が来て 笛太鼓

秋風に物炊くにほひ親しかり

秋寂や辛いカレーに舌焼いて

贅どこに刺しやと鴟の血眼に

百舌鳥というふ武士の声 秋暑し

秋天の光さしこむ石舞台

木枯に蚊遣豚などしまひけり

書に埋もれ更衣は逝きしそぞろ寒

神戸からコスモス畑見にゆくと

ぴうと鳴く鹿の日岡の風に立つ

石山を削りし石階力出ず

印南の紫つつじ 帰り咲く

痛々し霜の声する橋渡り

蝸に呼びさまされて秋を知る

菊谷

潔

遠くからだれかが呼ぶ。ふと目を覚ますと何時もと変わらないわが身横たわっていた。邯鄲の夢か南柯の夢であったのだろう。夢は楽しかったが、何か儂いものが滓（おり）のように残っている。此の世の栄枯盛衰も全て一時の夢に過ぎないのだ。人生おこることなかれ。「桐一葉落ちて天下の秋を知る」である。

ひぐらしによびさまされてあきをしる きくたにきよし

(六)

片白草むしろわたしが病んでゐる 升田ヤス子

片白草とは半夏生のこと。模様であるけれどこの草は満遍なく緑の葉でなく白斑があるのはなにか全うではないね。と思って覗いていたが、はて、と気が付いた。片白草よりむしろ私のほうが病んでいるのかも。と気付いた。

かたしろぐさむしろわたしがやんでいる まずだやすこ

(六)

白き部屋 ◎ 笹村 政子

ひぐらしの遠くのぞめば遠くより
吾子訪はば二階の灯る良夜かな
良夜かなさんふらわあの船明り
白桃のしたたる雫食みにけり
鈴虫の声を持ってゆく風のあり
秋出水明石大門の濁りかな
なにもかも濁流のもの秋出水
新盆の吾子に暮れゆく窓辺かな
八月や灯さば白き吾子の部屋
一人来てひとりと思ふ花野かな

▽「ひぐらし」の句から、「遠く(い)」というのを考えてみた。二つのものが空間的、時間的に、また心理的に離れているさま。「近くの反対、手が届かない。見えるものが遠く、聞こえるものが遠く、視覚、聴覚、意識、目指すもの、目標に対する距離、互いの距離(心、身体など)近づき難い精神状態)ほかにもあれこれ考えられる距離があるが、彼女は遠くに気持ちをおいているのかも。身ほとりから離れた何かを求めているのか、意識しないで遠くに意識をおいているのか。手の届かない距離に意識が飛んでいるのだろうか。それらの意識を遠くにおけば、身近に鳴く虫の声も遠くから聞こえて来るようであるし、身ほとりから遠くへ遠ざかって行っているような気分になったのだろう。いかにも軋らしい捉え方である。ひぐらしとは日暮であり一日中という意味もある。眼差しが遠くにあるのは漠然とものを考えている状態でもある。意識を遠くに置けば眼前に見えてくるものもあるはずである。

▽「白桃」の句、その状態を表現するのに、最も多いのが、「したたる」、水に漬けると「銀色」に輝くというのが常套な表現である。しかし常套な表現も一つ見方を変えると作品ががらりと変化する。そのことを彼女に助言するのをつい忙しさにかまけて忘れていた。この句の余分な表現は「雫」と「食み」である。したたる状態でどのような仕種を作者が取っているかを言えば良かった。すると「したたる」が桃の特徴をよく表現できる。

▽「鈴虫」の鳴き声が風にもって行かれたという気づき発想が独創的で風情がある。夢風撰候補。

▽「新盆」の句、作者は基督信仰者だが、亡くなったお嬢さんは嫁ぎ先の宗教(仏教)に従って新盆という仏教行事を行ったのだろう。同時作の「八月や灯さば白き吾子の部屋」も亡くなった仏が部屋にいてそこが明るくなったが、それを白くなったと言った。白いというのは白色、白い、明らか、明らかにする、ありのままに言う、汚れない、空白、という意味がある。第二義として、「説文解字・巻七」には「西方の色なり。陰、事を用ゐるとき、物色白し。入に従ひて二を合す。二、陰數なり」とある。これは五行説に基づくもの。五行説で白は、西方をいう。など政子の作品から大変勉強になった。ここに書く楽しみが多い所以(ゆえん)。

兄の手 ◎ 志方 章子

金色の身をくねらせて夏の鯉
人影の時折うごく簾かな
とんぼうの日差しに溶けてしまひけり
父母も夫も在さむ天の川
葉柳や見舞ひし兄の手の温し
七夕紙兄の回復願ひけり
蛭狩彼の世といふはどんなとこ
白南風や遺影の夫と見つめ合ふ
取りあへずバナナに腹を満たしけり
五月闇猫の聞き耳立ててをり

▽「葉柳」の作品兄上が御病気なのだろう。兄弟とはいえ異性の手を握るのは何か気恥ずかしいものがあるが、掲句はか細くなった手を握って万感の想いを伝えようとした。その手は予想外に温かく、意外であった。その温かみがまるで子どもの頃、手を引いてくれた兄の温かさだと直感したのだろう。そこに兄妹の互いの想いが蘇ったのだと思う。その妹の行動は手当である。幾分兄上も病の気が上がったにちがいない。「柳」は新芽のころが最も美しく、柳といえば春季だが、夏の葉の茂った柳も別の趣がある。掲句は夏、柳は青々と葉を濃くし、地面や川面に長く枝垂れ、ときに細い枝を風になびかせる。枝垂れて川面を水鏡とする風情も趣深い。単に「柳」は春の季語。掲句の情感が見舞いに行つた季節を通していて味わい深い句となった。同時作「七夕紙」も同じ心であろう。

▽「夏の鯉」の作品。夏の鯉はすっかり太って、動きも活発。その姿をみて身をくねらせていると表現した。その姿は鯉が方向転換した時にくねっているように見えたのだ。冬場と違っていかにも行動の活発な時期を詠んでいる。

▽「蛭狩」の句、彼の世というのは、死んだ後に行くときされる世界。死後の世界。来世。一世（いっせ）過去、現在、未来の中の一つで仏教の言葉。その境目があるように蛭は此の世、彼の世を自由に行き来しているように見える。蛭が灯っているときは此の世で消えた時は彼の世に行っているというのだ。私も蛭になって彼の世を一度覗いてみたいと願望するのは当然であろう。作者の望む彼の世に行つて蛭は作者の想いを伝え、闇の彼の世から戻つて、愛する人の想いを作者に伝えてくれるのである。しかしそれはホタル語だから人間の耳では聞き取れない。物理的には反宇宙があつてこの世と背中合わせと思うのだが、余り考えない方がいい。

※新しい年を迎えるにあたって、これからは明るく楽しい章子本来の句に戻るのもいいかと思う。

片白草 ◎ 升田ヤス子

その時の姿は自在金魚描く
みちのくや歌を枕の三尺寝
白鷺の北へ飛びたつ柳かな
水晶は六方柱状天の川
川原湯や落ちて来さうな天の川
文月や卒寿の翁に筆賜ひ
落蟬の跳ねてまた地にぶつかりぬ
片白草むしろわたしが病んでゐる
月下美人蛇の化身に違ひなし
月下美人髪逆立ててゐるわたし

▽片白草とは半夏生草のこと半夏生（はんげしょう）は雑節の一つで、半夏（烏柄杓）という薬草が生える頃。一説に、ハンゲシヨウ（カタシログサ）という草の葉が名前の通り半分白くなって化粧しているようになる頃とも。ハンゲシヨウ（半夏生）の花言葉は「内気」、「内に秘めた情熱」。だから俳句の場合は取り合わせもあるが掲句のように一元句で詠む場合もある。作者は「変な草」と思ったが、よくよく考えれば、私の方が変なのではないか？とふと我に返った。女性にとって大事な化粧が半端になっているわ、と反省しているとも。半夏生草とかいたが、雑節でなく植物の場合、混同しやすいので面倒くさいが「半夏生草」と表記して「はんげしょう」と呼ぶのである。もともと句の内容によつて草の方だと思わせる句もある。掲句の場合は「片白草」で趣きが薄れる。

▽月下美人の作品。その香りと姿は「白蛇抄」は水上勉（みずかみ・つとむ）の小説に出てくる女性と見ている。中国の白蛇伝をもとに書いた話で「蛇が、仙人修行をして人間となった女が、前世で自分の命を助けてくれた人間の男と数百年の時を経て再会し、さまざまな困難に襲われながらも、恋に落ちる」という民話。月下美人から「白蛇伝」に連想が及び、作者自らが白蛇になりながら月下美人は蛇の化身であると想像をたくましくしているのである。「髪逆立ててゐるわたし」とは月下美人に嫉妬していると連想をたくましくし、月下美人の化身と美貌を競っている状態。最近暗闇で六甲の左腕にすがってくる物の怪はヤス子であつたか。

▽「水晶」の句。地球自然界に直線は存在しないというのが一般だが、ある人によると「宇宙はビッグバンにより創造され、膨張中だということです。と言うことは、中心？から球状に広がり続けている、つまり球状の空間の中に宇宙があると思像すれば、すべての物は曲線になる」という説。身近なところでは水晶にも直線はある。専門的にはヤス子の言うように「六方柱状」の化学的に天の川を詠んだ。もう一句は河原湯に浸かっていたら天の川がはつきりを見せて「落ちて来さうな夢想に囚われたのだろう。彼女の今月の作品は不思議な感覚を詠んだ非現実的なものと現実的なもので、虚実皮膜の間を次には詠んでほしいと願う。まだまだ若い感覚に満ちている。

芋の葉 ◎ 藤生不二男

水甕に空の映れる稲の花
秋扇や浅く流るる高瀬川
猫じやらし尾つぽばかりが見えてをり
ことごとく水落とされし稲の花
石段に雨のしづくや萩の花
芋の葉のおもひおもひに吹かれをり
蜻蛉の目玉に映る遠嶺かな
石仏に遠き嶺ある木槿かな
ひぐらしや夕餉の膳のととのひぬ
降る雨の止むをまたずに法師蟬

▽芋の葉が思い思いに揺れる様子に気づいた。もともと芋の葉の形状からしてみな同じ揺れ方は出来ないのだから、吹く風の方は同じであっても、皆それぞれの意思を持って動いているように見える。というのが発見で、発見も俳句の大事な要素である。夢風撰候補。

▽高瀬川 の作品。何年前かに菊谷潔さんの陶芸個展が京都高瀬川沿いの町家で開かれた。六花の皆さんと展示会に伺って、京都町家のよろしさをその折に味わった。句のごとく高瀬川は浅く秋の水が流れていた。川には罪人ならぬ紅葉の葉が流れてきて風情を楽しませてもらった。菊谷さんの京都大学時代の友人のお家とかで、そこに住みたいと思っただの。

▽夏の終り近く、雨が止むか止まないかで法師ゼミがけたたましく鳴き始めた。まるで夏を惜しむかのようで。晩夏は物寂しさを募らせるような鳴き方。つくづくほうし、と鳴くその嘆きに晩夏は包まれてくるのである。

▽蜻蛉の目に遠い峰が写っていると見た。蜻蛉の目は透明に澄んでいるように見えるがトンボの複眼を虫眼鏡で見ると、ハチの巣のような六角形の目が集まってできていて、この小さな目を「個眼」といいその数は一万个から三万个にもなるといふ。レンズの部分では一つひとつ違う映像でマルチスクリーンのようになっているそうなのだ。その目に映る景色は夢の世界であろう。

▽稲の花の句。俳句でいう「落水」の季題。稲の花が咲くとあとは米粒が実ってくる。農家にとつても大切な水の管理をする苦労がへるし、稲は実って来るだけである。田んぼに棲む昆虫や貝類小魚は水が無くなる前に落水に乗って川に出てゆくのだ。

早乙女 ◎ 善野 行

早乙女のはぎの白さや柳かげ

遠蛙遊行柳の四面楚歌

田草取遊行柳の蔭を出づ

玉垣の涼しき遊行柳かな

文月や松枯色の目に立ちて

真木山の闇に仰げる銀河かな

囲む火の尽きて仰げば天の川

天の川逢瀬は雑居ビルのバー

百姓の日焼褒め合ふ立話

日傘差す男になつてしまひけり

▽「早乙女」の句。この句は句会の兼題「遊行柳」で出した句で、芭蕉が田植えを見ていて一枚を植え終わると立ち去ったという句を下敷きしているが、昔田植え歌を歌いながら早乙女が植えている場面を思い描きながら詠んだ。「はぎ」を私は脛（すね）と呼んだが、間違いで「ふくらはぎ」のことだった。女性の艶めかしいところをとらえるのは行のほうが数段に上。田を植える女性の屈んだとき白いふくらはぎを見たら、むらむらとこみ上げてくる欲情が抑えきれないであろうか。まだまだ私は生真面目だったと反省。もともと後白河上皇は待賢門院璋子を連れてお田植式に出かけている。その場面は略す。その折り田を植えているのは白拍子であった。（「待賢門院璋子の生涯」）

▽「遊行柳の四面楚歌」の句。遊行柳の周囲は田である。田植えの水が張られた場面を詠んだ。田蛙の声が姦しい。その状態が四面楚歌であると見たのだ。四面楚歌の詩は「項王の軍垓下に壁す。兵少なく食尽く。漢軍及び諸侯の兵、之を囲むこと数重なり。夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰く、漢皆已に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや、と。周りは敵だらけの状態である。私も子ども頃実家の周囲は田んぼで、蛙の合唱に責められた。同時作「田草取り」の句。柳の影で作業しているがぐさま日差しの中に出ない農作業の地獄を表現。焚火は冬の季語だが、最近焚火は夏から秋の季語になって来つつある。焚火と語り合いが尽きると空には天の川がある深夜の光景。雑居ビルで仰ぐ天の川は奈良のスタンドバーの句。天には織姫と彦星。地には男女の逢瀬。「よかつたら、鹿のくる弥勒ホテルで、寝て月を待ちませんか」などと、お戯れを。

▽百姓という言葉は不適切用語といわれそうだが、行は自らのことであるから、許されるのかも。百姓同士が道ばたで、「よつ日に焼けたやろ」「いやいや俺こそどうや」と日焼け自慢。俺こそ働き者だと自慢し合っているのである。ほのぼのとした光景。

▽「日傘」の句。初老になって、日焼けしたら染みになる。という健康被害の方が気になって、なりふりかまわず日傘を差そうとするのである。そういう自分を嘲笑している。なんとも哀しい物語。えっもしかしたら六甲のこと？夢風撰候補。

胡瓜もむ ◎ 住田千代子

人の後ついて茅の輪を潜りけり
裏庭に探すボールや茗荷の子
能舞台ひとひら赤く夏落葉
郭公や松の林の空の青
播鉢の目を洗ひゐる夏至夕べ
半夏生ぶつ切りにする蛸の足
ワイパーを最強にして雷を過ぐ
胡瓜もむ河童の好む塩梅に
命日は文披月夫の文
七夕月みな YOKOHAMA の消印よ

▽「夏落葉」の作品。能舞台に散った夏落葉の紅が際立って印象的。秋の紅葉した葉より季節に満たない葉が時季を全うできずに夏の暑さに負けて散る恨みの紅色であろうか。塵一つ無い能舞台に散った紅色の落葉が眼に強く印象的であったのだ。

▽すり鉢の目を洗うのは夏至の夕べ。夏至に食べるものは関西では蛸。蛸を食べるときすり鉢で搗った味噌と和辛子・お酢で、それに使ったすり鉢を束子で洗っているのだろうか。半夏生にも蛸の料理を食べるのである主婦らしい日常の光景を詠むのが得意な作者。

▽七夕月は文月のこと。ご主人の手紙か、すべて横浜局からのものだったのだろう。その思い出の手紙はすべて YOKOHAMA の割印があつてひととき懐かしい手紙なのであろう。陰暦の七夕月を用いながら消印は英文の消印とそのギャップに思い入れが強いのだ。

▽胡瓜もむの句、河童は誰かを例えているのだろう。胡瓜は河童の大好物。

▽七夕月（たなばたつき）は文披月（ふみひろげつき）女郎花月（おみなえしつき）秋初月（あきはつき）涼月（りょうげつ）親月（しんげつ）饞月（せんげつ）藪月（らんげつ）相月（そうげつ）七夜月（ななよつき）などと文月をいう。その語源は「真淵・宣長らは稲の穂の孕む穂含月ないし穂見月の略と解しているが、一般には文被月の略で、七夕のために貸す文をひらくところから出たと信じられている」と森澄雄は言う。農耕民族の日本人は月の運行を大切にしてきた。昔は月が驚くほど明るかったし日常の暦も月齢に深く関わっている。勿論原始の時代から月の満ち欠けの産卵など未だに月の運行の影響を強く受けている。人間でも女性は月経など月と因縁が深いし出産や命の終わりなども未だに月の満ち引きに深く影響をうけている。